



Title	<アダムの黙示録>について
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 9, 23-25
Issue Date	1974-06-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46300">http://hdl.handle.net/2115/46300</a>
Type	article
File Information	9_23-25.pdf



[Instructions for use](#)

〈ヘアダムの黙示録〉について

滝沢 武人

筆者の昨年の研究発表は、ヘアダムの黙示録 (Adama-pokalypse) についての諸研究を整理しつつその宗教史的位置を判定しようとするものであったが、以下においては、紙幅の都合もあり、荒井猷『ヘアダムの黙示録』におけるフォーステール」 (『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店、一九七一年、一七三～一九五頁) に限っていくつかの所見を記しておきたい。

それは、荒井氏のこの論文が、これまでの研究成果のほとんどすべてを批判的に消化しつつ独自のテーゼを提出しようとするものであり、更に又、今後わが国においてグノーシス主義を論ずる場合には、氏の秀れと、開拓者的研究業績をできうるかぎり多くの機会に公共の場において検討してゆく必要があると考えるためである。

荒井論文の一～四節は、五節「フォーステール・ベール」ヒ説批判」 (一八八～一九五頁) のための基礎的作業である。ベール」ヒ説とは、ヘアダムの黙示録」が、(1) 「前キリスト教的」そして「ユダヤ的・イラン的」グノーシス主義文書であり、(2) その宗教史的背景として「セツ派」に属する「シリア・パレスチナの洗礼宗団」が想定されるといふことである。ここで、(2) に関しては、荒井氏もこれを認めている (一九五頁)。また、(1) の後半部の「ユダヤ的・イラン的」ということ、すなわち荒井論文に則して言えば、フォーステールを主としてイランのゾロアスター教におけるサオシュアントとユダヤ教の「受難するメシア」から導入するということに関しても、荒井氏は積極的な反論をなしてはおらず、むしろベール」ヒ説を認めているのではないかと筆者には思われる。なぜならば、フォーステールの宗教史的背景に想定されるイラン宗教の救済者像を概観した後に、氏は結局のところ、「内容に立ち入って考察すれば、ゾロアスター教の宇宙観とこの文書のそれに正確な対応は認められないのであるが、ともかく宇宙史ないし救済史の三分割に関する限り、両者の間に形式的な一致が存在することは否定できないであろう」 (一八九頁) と判断しているからであ

る。少なくとも、この第一の批判の部分は「批判」となりえてはいないのでなからうか。荒井氏のベერიッヒ説への「批判」は、(1)の前半部の「前キリスト教的」という点についてのみなされていると思われる。すなわち、ユダヤ教の受難するメシアという「表象が「ラビ以前の時代」に遡るといふのは、ベერიッヒが主張するように「最近の」学説ではない、(一八九頁、傍点荒井氏)のであり、すでにシュエバルトによって証明されているように「早くとも紀元後二世紀以後」(一八九頁)であり、従って、「それがフォーステール像に与えた影響もまたキリスト教成立以後の時代に想定されるべきであろう」(一九一頁、傍点荒井氏)と考えるのである。筆者は、「受難するメシア」の成立時期について判断を留保せざるをえないのだが、少なくとも荒井氏が、なぜベერიッヒの支持するエレミアスの見解を斥け、シュエバルトの見解を受け入れるのか説明をなしていないので、氏のベერიッヒ説批判は説得力に欠けていると思わざるをえない。荒井氏と同様にシュットロフも、この文書を「後期の、しかしキリスト教によって影響されていないグノーシス主義」として「外キリスト教的グノーシス主義」(außerchristliche Gnosis)と呼んでいるが、単なる指摘にとどまっている。

この文書が「非キリスト教的」であることは一応認められよう(一九〇〜一九一頁)が、その「非」がいわば「外」(außer)なのかあるいは「前」(vor)なのかという判断は微妙であり、各人の主観に左右されていると言えよう。シュットロフ、クラウゼ、荒井氏は「外」と、マクリー、ルドルフは「前」と判断し、ベერიッヒは「前」という表示を、「キリスト誕生以前のグノーシス主義」ではなく、「二世紀のキリスト教的グノーシス主義に先行するグノーシス主義」と説明している。筆者は、この文書は前キリスト教的と想定することにより蓋然性があるのではないかと考える。すなわち、この書は旧約聖書批判、ユダヤ教批判の書であり、キリスト教的要素が未だ存在していないからである。そしてそのことと関係して、ルドルフによるマンダ教文書との密接な平行関係の指摘と、及びこの文書の救済者は「第二イザヤの苦難の僕の歌の上に建てられたグノーシス主義的ミドラシュの一種」であるというマクリーの指摘とが重要であると思われる。更に又、同じナゲ・ハマデイ文書中の非キリスト教的な『セームの積義』の救済者像が「前キリスト教的」(傍点筆者)であるというウィッセの報告がそのことを支持するであろう。なお、筆者は「真珠の歌」(ヘトマスの詩

篇》についても前キリスト教的なものと考える。荒井氏は、フォーステールの一四の由来に関して、イラン的よりギリシア的、ミトラ教的よりイシス宗教に近いとしているが(二九一―一九二頁)、筆者には納得しかねる。更に、その「第一三の王国」を「アレクサンドリア系のユダヤ教ないしはキリスト教」と推定しながら、特に「キリスト教」と考えるのだが(一九三―一九四頁)、根拠を欠いていると思われる。推定するならば、むしろ「ユダヤ教」ではなかるうか。なぜならば、マクラーが見抜いたように、この文書には「ユダヤ教の創造神と一二部族へのうすくヴェールでおおわれた敵意」が存しており、第一四のグノーシス主義者の「王無き世代」が「第一三の王国」を超越する最高の位置にひきあげられているからである。いずれにしても現段階においては、ヘアダムの黙示録に特にそのフォーステールの宗教史的位置に関して、確実なことはほとんど言いえてはいない。カセは、この文書が最終的に成立するまでに至るかなり複雑な前史を想定しているが、今後、そのような成立史の研究が宗教史的位置確定のために必要となるであろう。

## 学生生徒の宗教性の成長に 対する実証的研究

中村陽三

(1)はじめに 学会発表の折には調査票、学年別百分比表を報告資料としてあったが与えられた字数ではその再録が不可能なので調査報告の概要を記すにとどめる。

(2)調査研究の目的 中学高校という青年前期から中期にむかう発達のプロセスに於て宗教的人格がいかにして形成されうるかを教育プログラムとの相関の中でみる為にキリスト教主義学校の六年一貫教育の場にその実証の場を求めて今回の研究では宗教意識の側面でその発達のプロセスを調査しようとしたものである。

(3)調査対象 北星学園女子中学高校の女子生徒の中学一年から高校二年までの六組である。つまり中学一年四六人、中学二年四七人、中学三年四九人、高校一年四七人、高校二年普通科五〇人、英語科五八人の合計二九七